発行：特定非営利活動法人 北海道みなとの文化振興機構 北海道みなとの文化研究室　　発行日：令和６年（2024）３月31日

北海道 みなとまち紀行

釧路編①

第５号

■釧路編①

今回は釧路駅を出発し、詩人・石川啄木の足跡を訪ねて釧路の街の原点である米町周辺を散策し、その後、春採湖畔に建つ釧路市立博物館に学芸員の戸田恭司さんを訪ねてから、昼食を取り、幣舞橋の四季の像と、くしろ水産センター前庭の海の顕彰碑を眺めて釧路駅に戻る行程です。

屈斜路湖に源を発する釧路川が太平洋に注ぐ河口は、その東岸のやや突き出た知人岬（しれとみさき）によって遮蔽され、室蘭を出て東方に航海する船にとって貴重な泊地となっていました。江戸時代、松前藩はここにアイヌと交易する運上所を置き、屈斜路湖に住むアイヌ人を移住させました。釧路の地名の由来には諸説がありますが、函館税関「北海道奥羽港灣之状況」（明治38年）によると、そこで地名も「クッチャロ」と呼び、さらに転記して「クシュロ」または「クンユリ」というようになったそうです。また、米町の町名はここの場所請負人・米屋孫右衛門に由来します。

【港文館】

釧路駅からまっすぐ伸びる北大通を進み、釧路川を渡って右折しレンガ造りの港文館（**地図①**）に向かいます。港文館は、かつて啄木が２カ月半ほど記者として勤務した旧釧路新聞社の社屋の一部を平成５年（1993）に復元して今の場所に建てられました。建物の前では詩想を練るように彼方を見つめる啄木像が迎えてくれます。札幌出身の彫刻家・本郷新（ほんごうしん）の代表作の一つです。

港文館。右側に啄木像が立つ

本郷新制作の啄木像

明治33年（1900）、旭川と釧路の両地域から帯広に向けて鉄道の建設が始まり、明治40年（1907）に難工事であった狩勝峠が開通し、函館―札幌―旭川―帯広―釧路が鉄路で結ばれました。実家が破産し追われるように郷里を離れた啄木は、函館で一家団欒の時を持ったのも束の間、明治40年の大火で函館を離れ札幌、小樽と移り住みますが、勤めていた小樽日報社の内部紛争から退社して進退窮（きわ）まります。知人の計らいで釧路新聞社に招かれ、開通したばかりの鉄道に揺られ、明治41年（1908）1月21日夜、釧路駅に下り立ちます。凍てついた

> **さいはての駅に下り立ち　雪あかり**
> **さびしき町にあゆみ入りにき**

「啄木　雪あかりのまち」啄木と小奴に扮した若者が点燈してイベントが始まる。写真の左端は芸妓・小奴の揮毫した啄木の歌碑

夜空を仰ぎ、これから始まる生活への期待と不安を抱えて新天地の一歩を踏み出します。

啄木像に隣接して、釧路時代に仲の良かった芸妓・小奴が、その時の啄木の心境を詠った詩歌を揮毫（きごう）した歌碑が建っています。ここでは、啄木が釧路を訪れた日を記念して、毎年 1 月下旬に「啄木雪あかりのまち」のイベントが開催され、啄木と小奴に選ばれた若い男女によって雪あかりが点灯され、夜店が並び賑わいます。

この地に一歩をしるした日から 100 周年にあたる平成 20 年(2008)に、港文館をはじめ市内 6 カ所に「石川啄木　縁　インフォメーション」（以下、「啄木　インフォメーション」と略称）が設置されました。港文館の木製の引き戸を開け室内に入ると 1 階には港湾で栄えた釧路港の歴史や文化を学べる資料などを展示するコーナーとカフェスペースが設けられ、２階が啄木にまつわる資料が展示された資料館になっています。

釧路港文館 2 階の啄木資料館

【米町公園】

港文館を出て見晴らしがきく米町公園（**地図②**）へ。ここは「啄木 インフォメーション」の一つで、作家・林芙美子の意見によって建てられたという啄木の歌碑があります。

米町公園の啄木歌碑

しらしらと氷かがやき　千鳥なく
釧路の海の冬の月かな

釧路の自然を呼んだ詩歌は他にもあります。2 首、紹介しましょう。

さらさらと氷の屑が　波に鳴る
磯の月夜の行きかへりかな

西の空雲間を染めて　赤々と
凍れる海に日は落ちにけり

米町公園にある釧路港修築碑（上）と公園から望む釧路港（下）

啄木が釧路を去って 2 年後に、知人岬から港の建設が始まった

【本行寺】

米町公園から、啄木が加留多（かるた）に興じた本行寺（**地図③**）に向かいました。本堂の玄関を入り、受付で啄木の資料室を見たいと申し込むと 2 階奥の一室に案内してくれました。資料室の入り口には、啄木が故郷を詠んだ 2 首の短歌が飾られていました。

やはらかに柳あをめる　北上の
岸辺目に見ゆ泣けとごとくに

ふるさとの山に向かひて　言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

資料室正面の壁には、啄木の良き理解者で東京での生活を物心両面で支えた金田一京助が、釧路を訪れて小奴と語り合った新聞記事が展示されています。金田一京助は盛岡中学から東大に進んだ言語学者で、日本のアイヌ語研究の本格的創始者としても知られ、啄木を追想した「定本　石川啄木」を遺しています。

本行寺本堂の啄木資料館

啄木一人百首。啄木の短歌を加留多にした木札

本行寺の加留多会(模型)

【釧路市立博物館】

釧路市立博物館

啄木の資料を見た後、釧路市立博物館（**地図④**）に向かいました。黄色のタイルに覆われた円筒形の大きな建物は、タンチョウが大きく羽を広げた姿をイメージして設計されたものだと学芸員の戸田恭司さんに説明していただきました（設計者：釧路市出身の建築家・毛綱毅曠（もづなきこう））。建物に入ると正面にマンモスの骨格のレプリカが置かれ、左に進むと展示室があります。博物館の内部は 4 階まで吹き抜けになっており、生命のルーツを記録する DNA の機能と形状をイメージした建物中央のらせん階段を登り、各階の展示物を見学する設計になっています。1 階は釧路の大地の成り立ちと動植物、2 階が先史時代から現代までの歴史、4 階がアイヌ民族の生業・信仰・衣食住について紹介しています。1 階の柱にはボーリングされた釧路湿原の地層が巻かれ、2 階の壁に実際の貝塚が飾られているのは迫力があります。

戸田学芸員は厚岸のご出身です。小さい頃から歴史が好きで東京の大学を卒業すると、住み慣れた地域で公務員になり、できれば学芸員の資格を活かしたいと思ったそうです。そこで、さる方より紹介いただいた釧路市立博物館の館長に相談したところ、「市の職員になったら、人事異動で博物館での勤務ということもあるかもしれない」とのアド

川崎船を背にして立つ学芸員の戸田恭司さん

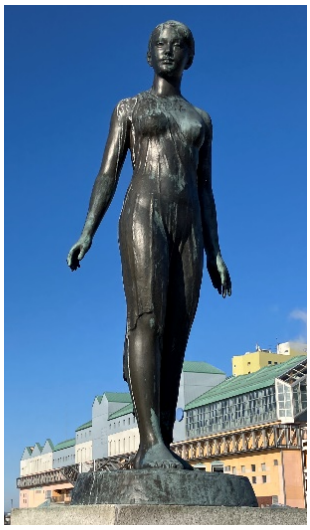
バイスをいただき、最初に釧路市の職員になり、その後の人事異動で博物館勤務となりました。現在は明治以降の地域史を担当されており、近年は神社・仏閣と地域のかかわりなど信仰に焦点をあてて調査・研究をされているそうです。インタビューの中で、釧路の獅子舞保存会が 80 年以上も活動を続けていることに敬意を込めて静かに話される姿が印象的でした。

【幣舞橋「道東の四季」】

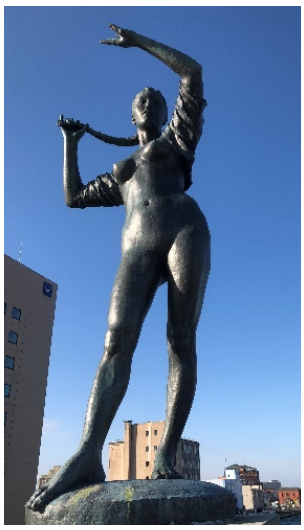
帰りに幣舞橋で「道東の四季」（**地図⑤**）の像を鑑賞しました。昭和 11 年（1936）に結成された新制作派協会（現・新制作協会）内に 3 年後、彫刻部を創設して日本の具象現代彫刻を牽引した 4 人の彫刻家の作品が一堂に会した貴重な空間になっています。これらの像が設置されるきっかけになったのは、先代の幣舞橋の架け替えでした。昭和 3 年（1928）に完成し、荘重でヨーロッパ風の美しさから北海道の名橋の一つに数えられ、市民に親しまれた橋でしたが、交通量の増加に伴って橋の両側の北および南大通りの道路幅が拡幅されたにもかかわらず、橋の幅員は元のままであったため、ラッシュ時には交通渋滞に悩まされていましたし、橋の老朽化も目立つようになっていました。この名橋の架け替えにあたり、北海道開発局釧路開発建設部は釧路市を通して市民の要望を求めたところ、10 回におよぶ市民討論の結果、4 基の橋脚を台座として芸術的香りの高い彫像を設置する要望が出されました。釧路市は「新幣舞橋の造形を考える市民懇談会」を設けて具体的な検討を行い、「道東の四季」をメインテーマにした当代一流の彫刻家による 4 基の裸婦像（舟越保武（ふなこしやすたけ）、佐藤忠良（さとうちゅうりょう）、柳原義達（やなぎはらよしたつ）、本郷新による春、夏、秋、冬の像）を設置することに決定したのです。それらの作家の中で石川啄木の彫刻を残しているのは、本郷新と舟越保武です。「道東の四季・春」の端正な造形に、雪解けの清冽な川の流れのような透明性と気品のある情緒性を感じる人は多いと思います。

高村光太郎訳「ロダンの言葉」を読んで彫刻家の道を志した舟越は、啄木や宮沢賢治も通った盛岡中学を卒業し、22 歳で東京美術学校（現・東京藝術大学）に入学しました。同期に、舟越と同じ歳で入学した、生涯の友であり互いに切磋琢磨した佐藤忠良がいます。舟越は、「若き啄木」（昭和 40 年）と題した啄木の頭像を製作した時のことを著書「石の音、石の影」（筑摩書房、昭和 50 年）で次のように述べています。

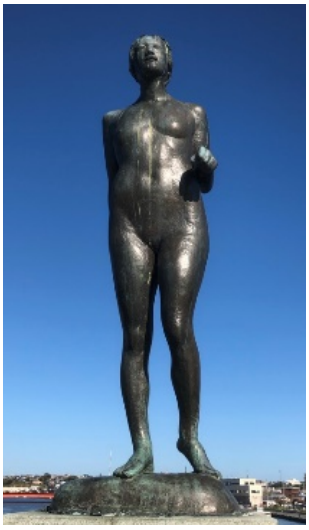
「美青年で、平凡にも見えるあの顔の、中に潜む詩人の哀愁の魂を作り出そうとは欲張りが過ぎたのか。とうとう諦めて、粘土の原型を壊してしまった。その夜、夢の中に、啄木が現れたのであった。あの啄木は祭りの夜更けに、ふるさとの土地を慕って現れたのか私のそばを通ったときの熱のあるような顔、運命の人、啄木の幻影が、ほんの瞬間のこと



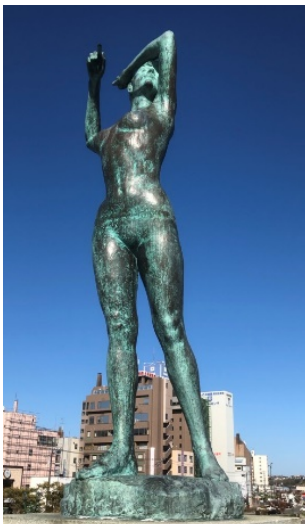
道東の四季《春》
制作：舟越保武



道東の四季《夏》
制作：佐藤忠良



道東の四季《秋》
制作：柳原義達



道東の四季《冬》
制作：本郷新

だったが、重く、私の中にとどまった」「私にとっての啄木の顔は、写真で見る顔とは別の、私だけに見えた顔になった。私は私なりに、夢の中の顔を彫刻にとらえた。」（「夏祭りの夜」）

本郷新の啄木像が忠実な写実的表現であるのに対し、舟越保武の頭像は象徴的表現となっています。我が国の記念碑の傑作と評される「長崎 26 殉教者記念像」をはじめ、その清澄な生命と高い精神性をたたえる舟越の作品には、詩的で幻想的な制作過程を経て結実したものが少なくありません。

4 基の彫刻設置は釧路市民の寄付金によって賄われ、昭和 52 年（1977）5 月に除幕式が行われました。像を製作した 4 人の彫刻家にとってはもちろんのこと、日本の彫刻界にとっても記念すべき出来事でした。

くしろ水産センターの前庭に立つ海の顕彰碑

手前から「渚」「渉」「濤」

制作：舟越保武

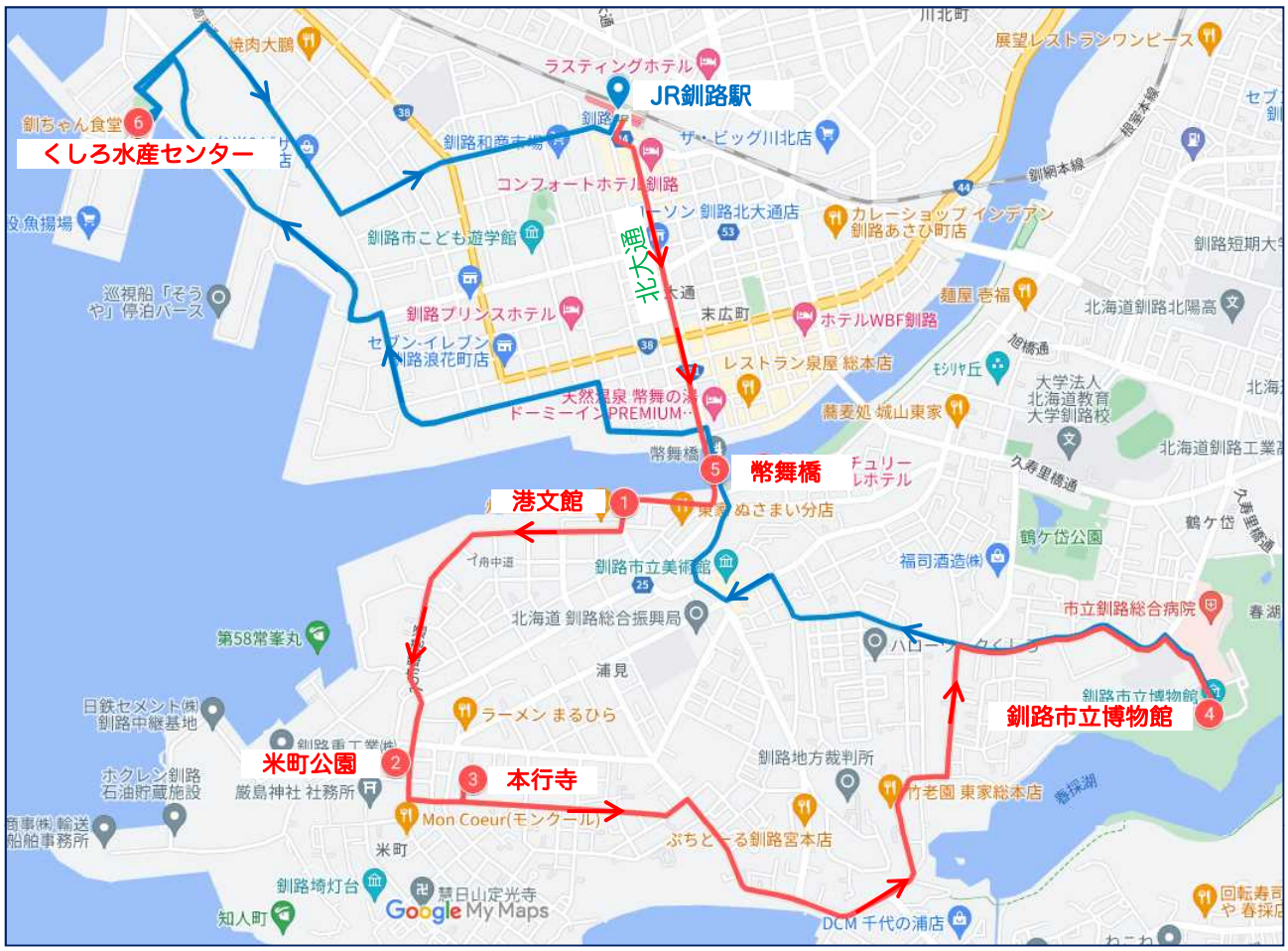
【くしろ水産センター「海の顕彰碑」】

舟越保武の作品は、釧路港東区北防波堤北灯台を望む、くしろ水産センター前庭（**地図⑥**）にも建立されていました。ここは釧路市水産資料展示室「マリン・トポスくしろ」がある施設で、実際に釧路で使われていた漁具をはじめ、海の自然科学、漁業近代史、先端技術などの資料が陳列され、釧路の水産業の実態や歴史も学ぶことができます。トポスという名称は古い時代のギリシャ語で「場」「間」「場所」という意味ですが、哲学的に「象徴的な場所」「根拠的な場所」という意味で使われているそうです。なるほど資料展示室らしい命名です。残念ながら 4 月まで休館だったので、見学は叶いませんでしたが、目的の舟越作品は前庭に 3 基並んでいました。昭和 61 年（1986）に制作された女性像の「渚」、少年像の「渉」、男性像の「濤」から成る「海の顕彰碑」です。冬の青い空と白い雪にも映える連作でした。

ここから車で 5 分、釧路駅に到着し、港町を後にしました。港町らしい短歌と銅像を鑑賞する旅となりました。

（関口信一郎　記）

【今回巡ったルート】



JR釧路駅 → ❶港文館（歌碑）→ ❷米町公園（歌碑）→ ❸本行寺（歌）→ ❹釧路市立博物館

❹釧路市博物館 → ❺幣舞橋（道東四季の像）→ ❻くしろ水産センター（海の顕彰碑）→ JR釧路駅

【今回巡った箇所のミニ情報】

地図①
釧路港文館
釧路市大町 2-1-12
電話 0154-42-5584
定休　月曜日（12 月 31 日～1 月 5 日）
営業時間　10:00～17:00
（5～10 月は～18:00）
入場無料

地図②
米町公園
釧路市米町 1 丁目 2 番
駐車場あり（普通 10 台、大型 3 台）

地図③
本行寺
釧路市弥生町 2-11-22
電話　0154-41-5329
※啄木に関する貴重な資料が展示され、受付で頼めば啄木資料室を見学させてもらえる

地図④
釧路市立博物館
釧路市春湖台1―7
電話 0154-41-5809
入館料　大人 400 円　高校生　250 円
小・中学生 110 円
開館時間　9:30～17:00
定休　毎週月曜日（祝日は翌日）
※月により変更あり

地図⑤
幣舞橋
釧路市北大通

地図⑥
くしろ水産センター
マリン・トポスくしろ
釧路市浜町 3―18
電話　0154-22-0191　入館無料
開館時間　9:00～16:00
休館日　日曜・祝日（12 月～4 月休館）
※海鮮丼が評判の「くしろ港町釧ちゃん食堂」が 1 階にある。
電話　0154-25-1117
開館時間　7:00～15:00
定休　日曜・祝日

NPO 法人 北海道みなとの文化振興機構
札幌市北区北 11 条西 2 丁目 2-17 セントラル札幌北ビル 5 階
e-mail アドレス：mail@minato_bunka.info